

2班：「IRデータと人の関係」

○小林裕美（徳島大学）、小泉崇人（茨城大学）、勝呂新（神戸大学）、田中賢治（鹿児島大学）、増田至（立命館大学）

1. 議論結果の概要

属性 全員が大学事務職員。

所属別 国立大学4名（評価・IR系2名、事業系2名）、私立大学1名（評価・IR系）

役職等 課長級 2名、課長補佐級2名、係長級1名

個別課題

データ関連（2-2データ整理）、評価・IR設計関係、数量データ解析、解釈、活用支援（レポートニング）、人材育成

(1) 議論の流れ、ポスター作成のプロセス

- ・参加者の皆様から個別課題について説明、共有。
- ・討議をしていく中で、データ関連と人材育成に課題が集約。
- ・個人ワークで、各自が考える具体的な課題、活用方法、解決策等を自由に記述。
- ・個人ワークで作成したカードの共通性を議論しながら、グループ化。
- ・データ関連のキーワードに対しての人・組織の振る舞い等として2つの流れで整理。
- ・ポスター内容

タイトル：IRデータと人との関係

『IRデータ』について、「データ収集と利用の目的」、「データ定義」、「データの集め方」、「データの整理」、「データの活用」の5段階の流れで整理。この5つの段階で起こる『人と組織の課題』を連関づけて整理した。

(2) ポスターの説明

タイトル：IRデータと人との関係

I 『IRデータ』

各段階での主な課題等は次のとおり。

- ① データ収集：目的、必要性等の認識共有。
- ② データ定義：定義の明確化、共有化、継続性。
- ③ データの集め方：手作業とシステム化、業務システム・部署所有のデータと評価用データシステムとの関係、融合化。
- ④ データ整理：ファクトブック等の作成によりデータの継続性等の見える化が行える。但し、ファクトブック等の作成で終わるのではなく、いかに有効活用をするかが課題。
- ⑤ データ活用：公表のターゲットが誰で（文部科学省、企業、評価者、保護者、学生等）あるかで見せ方が変わる。触発するデータの提示という成功例の積み重ねの重要性。

II 『人と組織の課題』

I-① 最終的になにをどうしたいのかという共通理解が必要。

I-② 担当者が異動になったときや定義が変更されたときの対応。データは、個人ではな

く、大学組織全体のものという意識へ。

I-③ データ入力担当者（現場）とデータ活用・分析者（IR・評価室）との意識・認識の共有化。

IR人材育成：スペシャリストVSゼネラリスト論があるが、まず、大学の様々な部署を経験し、現場を知ること。データ活用マインド（evidence-based）、基礎的なデータ処理スキルは職員組織全体、一般職員から持つべきではないか。

(3) まとめ：重要なのはコミュニケーション！データとデータの間をつなぐのは人である。

2. グループ討論を通して感じた評価やIRを改善に活かすためのコツ、感想等

- ・データに対する目的、定義を明確化し、組織として共有化を図る。
- ・IR・評価担当部署と事業部署（現場）の間のデータをつなぐのには、人とのコミュニケーションが重要。
- ・大学職員の基本スキルとして、IRマインド醸成を図ることが必要である。

(了)

2班 IRデータと人の関係

IRデータ

人と組織の課題

データの収集と利用の目的

データ収集は何のため？	必要性を説明しているか、認識共有しているか。	データ活用目的を共有：意識したデータ収集の必要性
データを集める目的	利用目的の周知・なぜ・何のために・何時までに・何に使われるか	データ提供者へのフィードバック（集めたデータがどう加工され利用されたか）

執行部の要望（本当は欲しいけどあがって来ないデータ）の把握・提供	IRの意義・積極的・ポジティブな方向からの意識付け
IRの3つの知性（専門的/分析的、問題、文脈）のバランスを意識した組織設計の追求の重要性	組織のガバナンス、マネジメントと相性のよいIR設計の模索
	最終的に何をどうしたいのか？ 共通理解

データの定義

教学系データのゆらぎ（部局ごとにかリキュラムや都合に合わせて登録を行っている。）	データ定義の共有化・継続性	データ定義の明確化
生データ→定義づけ・プロセス→加工	収集するデータの項目決定・必要となる項目の変動	データの定義、プロセス → 途中で変更された時...いかに対応できるか。

個人→大学組織全体がデータへの意識を持つ（IRマインド？）
担当が替わった時定義が変わったとき（継続性を持たせる）

データの集め方

システム化（お金が...応用×など） ↑↓ 手作業（人のスキル、応用○）	業務システム ↑↓ 評価用のデータシステム	作業段階 → 結果 どこを〇っているか
システムの作り込みによる集中化、省力化と状況変化への機動的対応の難しさ	現場（発注先）のことは知っているか？	業務の系列ごと・部署ごとに持つデータの融合化
データの網羅性、正確性と迅速性、負担とのトレード・オフ	入力の...やらされ感	収集（オーダー）、質問がズれてないか

現場（各部署、部局、教職員個人）の意識を変えるには？	データ入力担当者から結果を分析・活用する者との認識・意識の共有化・共通理解
データとデータの間は人でつなぐ（意思決定につながるデータ収集・〇〇・分析）	結局は、人と人とのコミュニケーション

重要なのはコミュニケーション！

データの整理

factbookの作成、改訂（データ活用文化の浸透、意味のあるデータ、情報への改良）	Factbookの有効性作成で終わってないか？	資料集やファクトブックは必要作るだけでなく、有効に活用する。
DB←→スタッフ（職員）は使いこせるか	分野横断的なデータの掛け合わせから見えてくることの典型例を共有することによるデータ一元化、組織横断的データ活用の可能性	データの継続性から誤りを発見ファクトブック等

データの活用

データの見せ方で評価者の印象も変えられる	公表する際のターゲットは？ ・文科省・企業・保護者・学生 → 見せ方が変わる	指標の決め方でデータの意味も変わる
データ活用の意義・分析する（意味）意義	外圧 → 大学の文脈への落とし込み	触発するデータの提示という小さな成功例の積み重ねの重要性

職員の育成 スペシャリスト ゼネラリスト	大学の様々な部署、現場を経験
データ活用のマインド（evidence-based）は職員組織で担保すべき（発生源データ管理、継続的管理の見地から）	基礎的なデータ処理ができるスキルは一般職員でも必要となっているのでは？ → 指示すらできない